

親が子どものスポーツ活動に参加することと 地域におけるソーシャル・キャピタルとの関 連：NPO法人川崎市法政トマホークス倶楽部 の事例

SANO, Moeko / 荒井, 弘和 / 佐野, 信 / 鈴木, 郁弥 / 佐野,
萌子 / SAN0, Makoto / ARAI, Hirokazu / SUZUKI, Fumiya

(出版者 / Publisher)

法政大学地域研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

地域イノベーション：JRPS：journal for regional policy studies

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

2016-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013168>

親が子どものスポーツ活動に参加することと 地域におけるソーシャル・キャピタルとの関連 —NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部の事例—

佐野 萌子¹⁾

鈴木 郁弥^{1) 2)}

佐野 信¹⁾

荒井 弘和^{1) 3) 4)}

要旨

本論文の目的は、NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部に子どもを通わせる親を対象に、子どものスポーツ活動への参加度合いと地域コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルとの関連を検討することである。対象者は、NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部に所属する小学校1-6年生の親57名（男性29名・女性28名）であり、質問紙を用いた横断的調査を実施した。その結果、「地域交流」因子と「一般的な人への信頼」、「家族交流」因子と「友人とのつきあい」、「健康・楽しみ」因子と「一般的な人への信頼」、「家族勧誘」因子と「同僚とのつきあい」因子、「他人勧誘」因子と「同僚とのつきあい」について、いずれも負の相関が見られた。また、「子ども交流」因子と「友人とのつきあい」については、正の相関が見られた。子どものスポーツ活動に参加することで得られる、地域を含む家族外の人々との交流にメ

リットを感じている人ほど、日頃の人への信頼も高いと考えられる。また、「家族勧誘」因子及び「他人勧誘」因子と「同僚とのつきあい」の相関については、子どものスポーツ活動に参加したきっかけについて、内的な要因より、家族を含む他者の勧誘、つまりは外的な要因を重視している人ほど、同僚とのつきあいについては積極的であると考えられる。同様なつきあいとして聞いている、友人・親戚については、相関は見られなかった。また、唯一正の相関が見られた、「子ども交流」因子と「友人とのつきあい」について、スポーツ活動への参加の際に、子どもと交流する人ほど、友人とのつきあいは盛んではないことが示唆された。

キーワード：親子参加、地域交流、家族交流、運動習慣、ボランティア

Relationship between parents' involvement in their children's sports activities and social capital in the local community: A case study of the Kawasaki-city Hosei Tomahawks Club

Moeko Sano⁵⁾

Fumiya Suzuki^{5) 6)}

Makoto Sano⁵⁾

Hirokazu Arai^{5) 7) 8)}

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship between involvement in children's

sports activities and social capital in the local community among parents of children who visit the Kawasaki-city Hosei Tomahawks Club.

1) 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター スポーツチーム・マネジメント研究会

2) 法政大学大学院人文科学研究科

3) 法政大学スポーツ研究センター

4) 法政大学文学部

5) The Sports Team Management Research Group, The Research Institute for Innovation Management

6) Graduate School of Humanities, Hosei University Graduate School

7) Sports Research Center, Hosei University

8) Faculty of Letters, Hosei University

Participants included fifty-seven parents (twenty-nine fathers and twenty-eight mothers) who were members of the Kawasaki-city Hosei Tomahawks Club. We used a questionnaire for this cross-sectional investigation. The Research Ethics Committee of the Department of Psychology, Faculty of Letters, Hosei University and Major of Psychology, Hosei University Graduate School approved this study.

Findings revealed the following associations: “interaction with others in one’s community” was associated with “trust in common people,” “interaction with one’s family members” was associated with “relationship with friends,” “health and fun” was associated with “trust in common people,” “solicitation from family members” was associated with “relationship with colleagues,” “solicitation from others” was associated with “relationship with colleagues,” and “contact with one’s children” was associated with “relationship

with friends.”

It was found that parents who considered it beneficial to interact with others outside the family by participating in children’s sports activities tended to trust common people. With reference to the opportunity to participate in their children’s sports activities, it was indicated that parents who were more focused on solicitation of others, including family members, would be positive about building relationships with colleagues. However, it was observed that parents who interacted with their children during participation in their sports activities might not be positive about socializing with friends.

Keyword: parent and child participation, interaction with others in one’s community, interaction with one’s family members, exercise habit, volunteer

I 問題と目的

近年、少子高齢化や核家族化の進展により、地域コミュニティの衰退が進みつつある。その状況を変えるためにも、今こそ地域のつながりやコミュニケーションを増やし、治安の維持や人々の健康な暮らしを守っていくべきだと考える。

これらの地域のつながりを語る上で、現在重要視されている考えの1つとして「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」が挙げられる。Putnam [1993] は、ソーシャル・キャピタルとは、「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」と定義した。これは個人や団体（地域）を対象に、内閣府をはじめとする様々な機関がソーシャル・キャピタルに注目した調査を行っている。しかし、その一方で、ソーシャル・キャピタルに関する統一した定義はなく（湯浅・西田・中原 [2006]）、各研究者がそれぞれ定義をして調査を行っているという現状もある。

人と人とを結びつけるソーシャル・キャピタルは、本来は人々の生活を豊かにし、健康観や幸福感とも深く結びついている。また、運動習慣とも関連があり、運動習慣のある者の方が地域住民との接触頻度が高いとも考えられている（Arai, Nagatsuka, & Hirai [2008]）。日本の地域コミュニティはまだまだ活発であると考えられるか

もしれないが、稲葉（2011）によれば、「重要な事柄を相談する人がいない」と考える人の比率は増加傾向にあり、「無縁社会」・「無縁死」という言葉を聞くことも増えたとされ、地域という身近な枠で捉えた場合、衰退の傾向にあるとも考えられる。

そこで、地域コミュニティの活性化に関する知見を得ることを目指して、本研究では、子どものスポーツ活動に積極的に参加する親に着目する。近年、子どもを熱心に習い事に通わせる親は多い。その習い事はスイミング・サッカー・ダンス・野球・柔道・バレエ・ピアノ・習字・学習塾など多岐に渡る。そのような子どもの習い事を通じて、その子どもだけでなく親同士の交流が生まれている可能性があり、その親同士の交流はいずれ、地域のコミュニティとして発展するのではないかと予想される。

本研究では、子どものスポーツ活動に着目し、NPO法人川崎市法政トマホークス倶楽部に子どもを通わせる親を対象に、日頃の身体活動や家族の人数・家族構成を尋ねるとともに、子どものスポーツ活動への参加度合いと地域コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルとの関連を調べることを目的とする。また、自由記述により、参加のきっかけや参加できない理由等を聞くことで、地域コミュニティの活性化につながると考えられる、子どものスポーツ活動への参加に関連する要因を検討し、今後より多くの親の参加を促すための方策を提示することを目指す。

II 方法

1. 調査対象者

NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部に所属する小学校1～6年生の親57名（男性29名・女性28名）。

今回調査対象としたNPO法人川崎市法政トマホークス倶楽部は、法政大学体育会アメリカンフットボール部と提携するNPO法人である。神奈川県横浜市中原区・高津区・幸区等を中心に活動し、主に小学生と中学生にアメリカンフットボールの簡易版であるタッチフットボールやフラッグフットボール（タックルと呼ばれる行為の代わりにタッチをしたり、フラッグを取ったりすることをルールとして定めている）を指導している。

2. 調査期間

調査期間は2013年10月下旬～11月上旬であった。

3. 調査手続き

事前に対象者が送信先として登録されているメールリストを使用し、研究目的等の説明をした。その後、グラウンドに来ていない調査対象者にも配布できるように、練習を終えた調査対象者の子どもに対し、説明文書・同意書及び質問紙を配布した。また調査対象者が了承した場合は、電子メールの添付ファイルにて配布した説明文書・同意書及び質問紙データを印刷し、回答してもらった上で、持参するように依頼した。

なお、本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け、研究実施の承認を得ている。

4. 調査内容

(1) 対象者の基本情報

(a) 性別、(b) 年齢、(c) 同居している家族の人数、(d) 家族構成、(e) 今後もこの地域に住み続けたいかどうかを尋ねた。

(2) 運動行動の変容ステージ

表1の5項目からなる尺度（Oka, Takenaka, & Miyazaki [2000]；岡 [2003]）を用いた。この尺度は、過去およ

び現在における実際の運動行動と、その運動行動に対する準備性を測定する項目で構成されている。表1に5項目の詳細を示した。その中の定期的な運動とは1回あたり20～30分以上の運動を週2～3回以上行うことを示しており、5項目の中から現在の自分の考えや行動に当てはまる変容ステージを1つ選択する。

(3) NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部の活動に関する質問

NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部の活動に関する質問項目については、2013年5月に、同倶楽部で子どものスポーツ活動に参加している5名（男性4名、女性1名）を対象に行ったインタビュー調査で得られた回答を元に作成した。

- 1) 子どものスポーツ活動に参加することの恩恵（ここでは送り迎えをすることから実際にコーチとして参加するまでの幅広い参加と定義した）について、5件法「全くそう思わない (1)」～「あまりそう思わない (2)」～「どちらともいえない (3)」～「すこしそう思う (4)」～「かなりそう思う (5)」で尋ねた。質問は表2に示した14項目であった。
- 2) 子どものスポーツ活動における行動について、5件法「全くそう思わない (1)」～「あまりそう思わない (2)」～「どちらともいえない (3)」～「すこしそう思う (4)」～「かなりそう思う (5)」で尋ねた。質問は表3に示した9項目であった。
- 3) 子どものスポーツ活動に参加したきっかけ（ここでの参加とは実際にスポーツに参加するというものを定義した）について、5件法「全くそう思わない (1)」～「あまりそう思わない (2)」～「どちらともいえない (3)」～「すこしそう思う (4)」～「かなりそう思う (5)」で尋ねた。質問は表4に示した11項目であった。
- 4) 子どもが入部したきっかけ：子どもが上記クラブに入部したきっかけについて、自由記述にて回答を求めた。
- 5) 親である自分が練習に参加することで自分自身に生じた変化：練習に参加することで、自分自身（親）に生じた変化について、自由記述で回答を求めた。

表1 運動行動の変容ステージ

1	私は現在、運動をしていない。また、これから先もするつもりはない（無関心期）
2	私は現在、運動をしていない。しかし、近い将来（6か月以内）に始めようとは思っている（関心期）
3	私は現在、運動をしている。しかし、定期的ではない（準備期）
4	私は現在、運動をしている。しかし、始めてから6か月以内である（実行期）
5	私は現在、定期的に運動をしている。また6か月以上継続している（維持期）

表2 「子どものスポーツ活動に参加することの恩恵」 質問項目

1	子どものスポーツ活動に参加することで、自分の身体が健康になる
2	子どものスポーツ活動に参加することで、ストレス解消になる
3	子どものスポーツ活動に参加すると、利害関係のない知人と交流できる
4	子どものスポーツ活動に参加することは、楽しい
5	子どものスポーツ活動に参加することを、子どもが楽しみにしていると思う
6	子どものスポーツ活動に参加することは、親子で過ごせる貴重な時間である
7	子どものスポーツ活動に参加することで、家族間の会話が増えると思う
8	子どものスポーツ活動に参加することは、子育てに関わりがあると思う
9	子どものスポーツ活動に参加することで、家族の一体感が生まれる
10	子どものスポーツ活動に参加することで、地域の人との交流が増える
11	子どものスポーツ活動に参加することで、達成感や充実感を味わえる
12	子どものスポーツ活動に参加することで、地域への愛着心が深まる
13	子どものスポーツ活動に参加することで、価値観を共有できる仲間ができる
14	子どものスポーツ活動に参加することで、地域・社会に対する貢献ができる

表3 「子どものスポーツ活動における行動」 質問項目

1	練習に父母コーチとして参加している
2	空き時間などに子ども達とキャッチボールをしたりする
3	練習中グラウンドの近くから子どもの様子を見ている
4	父母だけで出かけたり、食事をすることがある
5	グラウンドに送り迎えをする
6	子どもを含めて、練習の前後でご飯を一緒に食べる
7	他の父母とはあいさつを交わす
8	子育てについてなど、世間話をする
9	倶楽部の活動とは関係のない話を互いにする

表4 「子どものスポーツ活動に参加したきっかけ」 質問項目

1	見ているだけでなく口を出したくなったから、参加するようになった
2	子どもが勝ちたいと言うようになったから、参加するようになった
3	運営するスタッフが不足していたので、参加するようになった
4	子ども達の安全管理をもっと強化したいと思って参加するようになった
5	もともとスポーツが好きだったので、参加するようになった
6	見ているだけでなく自分も動きたくなったので、参加するようになった
7	コーチに誘われて、参加するようになった
8	子どもに練習に参加してほしいと言われて参加するようになった
9	健康に不安があったので、参加するようになった
10	家族に言われて参加するようになった
11	既に参加している父母から誘われたので参加するようになった

- 6) 親が練習に参加することで子どもに生じた変化：親が練習に参加することで、子どもに生じた変化について、自由記述で回答を求めた。
- 7) 実際に参加しているのは父親・母親のどちらが多いと感じるかとその理由：実際に参加しているのは父親・母親のどちらが多いと感じるか、そして、その理由を自由記述で回答するように教示した。

(4) ソーシャル・キャピタル

内閣府国民生活局市民活動促進課（2006）から、以下の5項目を用いた。全般的に、得点が低い場合に、ソーシャル・キャピタルが好ましい状態を示している。

- 1) 一般的な人への信頼について：一般的に人は信頼できると思うか、それとも信頼できないと思うかを尋ねた。回答は、「ほとんどの人は信頼できる (1)」～「両者の中間 (5)」～「注意するに越したことはない (9)」または「わからない (欠損値として処理)」から、自分の考えに当てはまる数字を1つ選択する。
- 2) 旅先や見知らぬ土地で出会う人への信頼について：1と同様に、自分の考えに当てはまる数字を1つ選び選択するよう教示した。
- 3) 近所の方とのつきあいについて：近所の方とのつきあいについて、そのつきあいの程度とつきあっている人の数についてそれぞれ、以下の1～4までの得点幅（4件法）から、自分の考えに当てはまる数字を1つ選択するよう教示した。
 - (a) つきあいの程度：「互いに相談をしたり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力しあっている人もいる (1)」～「日常的に立ち話をする程度のつきあいは、している (2)」～「あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない (3)」～「つきあいは全くしていない (4)」。
 - (b) つきあっている人の数：「近所はかなり多くの人と面識・交流がある（概ね20人以上）(1)」～「ある程度の人との面識・交流がある（概ね5～19人）(2)」～「近所のごく少数の人とだけと面識・交流がある (3)」～「隣の人がだれかも知らない (4)」。
- 4) その他のつきあいについて（頻度・手段）：3項目（「友人・知人」、「親戚・親類」、「職場の同僚」）それぞれについて、つきあいの頻度と手段を1つずつ選択するよう教示した。いずれも選択肢は以下の通り共通であった。また、職場の同僚とのつきあいについては、職場以外でのつきあいに限定した。
 - (a) 頻度：「日常的にある（毎日～週に数回程度）(1)」～「ある程度頻繁にある（週に1回～月に数回程度）(2)」～「ときどきある（月に1回～年に数回程度）(3)」～「めったにない（年に1回～数年に1回程度）(4)」～「全くない（もしくは友人・知人／親戚・親類／同僚はいない）(5)」

- (b) 手段：「直接会って (1)」、「電話で (2)」、「電子メールで (3)」、「手紙などで (4)」、「その他 (5)」。
- 5) 地域（小中学校区から市区町村の範囲）での活動状況について：住んでいる地域の、町内会や自治会・子ども会・老人会・消防団などの「地縁団体」「地縁活動」は盛んだと感じるかどうかを尋ねた。回答方法は、「非常に盛んであると思う (1)」～「ある程度は行われていると思う (2)」～「ほとんど活動は行われていないと思う (3)」～「そういった地縁団体は存在しないと思う (4)」または「わからない (欠損値として処理)」から、自分の考えに当てはまる数字を1つ選択するよう教示した。

5. 分析方法

まず、本研究のために作成した3つの尺度について因子分析を行った。つづいて、尺度の内的整合性を検討するために、 α 係数を算出した。その後、「対象者の属性と各因子」、「各因子とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目」、「対象者の属性とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目」の相関分析を行った。ソーシャル・キャピタルに関する項目について、先述の通り、統一された定義は存在しないため（湯浅ら [2006]）、今回は、ソーシャル・キャピタルに関する内閣府の1つの尺度を使用し、合計点等は採用せず、各質問項目において、相関分析を行った。また、「対象者の属性」については、「運動習慣」・「家族の人数」・「家族構成」の回答を採用した。なお、欠損値のあった回答についても、分析ごとに採用できる回答を採用したため、有効回答者数は各分析で異なった。

また、自由記述回答項目に関するデータの整理・集約は、KJ法（川喜田 [1967]）の4つのステップのうち、1つ目の「紙切れ作り」および2つ目の「グループ編成」に基づいて行った。報告された自由記述をまとめ1つずつカードにした上で、作業員間で議論を行い、研究目的に鑑みて、同意にいたるまで吟味・検討した上で、それらのカードをカテゴリに整理・集約した。集約が困難な回答があった場合は、無理に他の回答群に集約せず、そのまま独立して扱った。KJ法は、NPO法人川崎市法政トマホーク倶楽部のスタッフである22歳（女性）と、NPO法人川崎市法政トマホーク倶楽部のフラッグフットボール体験会に参加経験のある60歳（男性）の2名で行った。

III 結果

1. 対象者の人口統計的データ

対象者の属性 対象者は、男性 29 名、女性 28 名の計 57 名で、平均年齢は 42.7 歳であり、30 代が 21%、40 代が 77%、50 代が 2%であった。また、家族構成については同居人数 4 人と回答した割合が最も多く、51%であり、5 人は 21%、6 人は 7%であった。その中で家族構成（2 世代・3 世代・その他）の割合は、2 世代が 51%を占め、3 世代は 9%、その他 1%であった。また、今後もこの地域に住み続けたいかどうかという質問に対しては、79%が今後も住み続けたいと回答し、16%がどちらともいえないと回答した。

2. 「子どものスポーツ活動に参加することの恩恵」因子構造

本研究で使用した「子どものスポーツ活動に参加することの恩恵」に関する質問 14 項目について、因子分析（重みなし最小 2 乗法、プロマックス回転）を行った。最終的に 3 因子、14 項目が抽出された。最終的な因子分析結果を表 5 に示す。

第 1 因子 6 項目は、子どものスポーツ活動に参加することで得られる地域の人との交流や、それに付随して得られる充実感や地域への愛着に関する項目であり、「地域交流」因子（ $\alpha = .879$ ）とした。第 2 因子 4 項目は、「家族交流」因子（ $\alpha = .851$ ）とし、子どものスポーツ活動に参加することで生まれる家族間のコミュニケーションに関わる項目をまとめた。第 3 因子 4 項目は、自分自身の健康に関する項目や、子どもも含め、この活動を純粹に楽しいと考えている項目であり、「健康・楽しみ」因子（ $\alpha = .791$ ）とした。

3. 「子どものスポーツ活動における行動」因子構造

「子どものスポーツ活動における行動」に関する質問 9 項目について、因子分析（重みなし最小 2 乗法、バリマックス回転）を行い、最終的に 2 因子、9 項目が抽出された。最終的な因子分析結果を表 6 に示す。

第 1 因子 5 項目は、いずれも子どもと関わりを持つ参加であり、「子ども交流」因子（ $\alpha = .785$ ）とした。第 2 因子 4 項目については、同じ参加でも他父母との交流を中心に考えられた項目であり、「父母交流」因子（ $\alpha = .764$ ）とした。

表 5 「子どものスポーツ活動に参加することの恩恵」の各項目の因子負荷量と因子の構成

因子名 各因子における項目の内容	因子負荷量			平均値 (標準偏差)
	F1	F2	F3	
F1 地域交流				
価値観を共有できる仲間が増える	.785	.010	-.016	3.98 (0.88)
地域の人との交流が増える	.782	.069	-.106	3.74 (0.95)
地域への愛着心が深まる	.676	.225	-.074	3.35 (1.03)
達成感や充実感を味わえる	.672	.021	.058	4.00 (0.93)
地域社会に対する貢献ができる	.629	.045	.063	3.18 (0.95)
利害関係のない知人と交流できる	.617	-.188	.338	4.19 (0.91)
F2 家族交流				
家族の一体感が生まれる	-.032	.905	-.038	4.04 (0.87)
家族間の会話が増えると思う	.001	.751	.000	4.28 (0.75)
親子で過ごせる貴重な時間である	.127	.683	-.010	4.12 (0.82)
子育てによい影響があると思う	.062	.532	.269	4.33 (0.79)
F3 健康・楽しみ				
ストレス解消になる	-.131	.084	.825	3.70 (1.03)
体が健康になる	-.071	.133	.717	4.02 (0.95)
楽しい	.337	-.070	.621	4.25 (0.91)
子どもが楽しみにしていると思う	.153	-.105	.477	4.05 (0.93)
因子間相関	F1	-	.562	.711
	F2		-	.497
	F3			-

4. 「子どものスポーツ活動に参加したきっかけ」因子構造

「子どものスポーツ活動に参加したきっかけ」に関する質問9項目について、因子分析（重みなし最小2乗法、プロマックス回転）を行い3因子、11項目が抽出された。最終的な因子分析結果を表7に示す。

第1因子7項目については、いずれも内的に動機を持つ参加であるため、「自発的参加」因子（ $\alpha = .913$ ）とした。第2因子2項目については、家族からの勧誘に関する項目であり、「家族勧誘」因子（ $\alpha = .713$ ）とした。第

3因子2項目については、同じ勧誘でも、家族ではなく、他父母やコーチなどの周囲の人からの勧誘に関する項目であり、「他人勧誘」因子（ $\alpha = .834$ ）とした。

5. 各因子と調査対象者の属性の関連性

各因子と調査対象者の属性（運動習慣・家族の人数）の関連性を見るために、相関分析を行った（表8）。

家族の人数と「地域交流」因子・「健康・楽しみ」因子・「家族勧誘」因子の3つに負の相関が見られた。つまり、家族の人数が少ない程、子どものスポーツ活動に

表6 「子どものスポーツ活動における行動」の各項目の因子負荷量と因子の構成

因子名 各因子における項目の内容	因子負荷量			平均値（標準偏差）
	F1	F2		
F1 子ども交流				
子どもたちとキャッチボールする	.775	.158		2.79 (1.66)
グラウンドに送り迎えをする	.717	-.029		3.80 (1.37)
子どもの様子を見ている	.633	.328		3.59 (1.40)
練習に父母コーチとして参加している	.597	.252		2.13 (1.66)
子どもも含めて練習の前後でご飯を食べる	.489	.151		2.89 (1.64)
F2 父母交流				
倶楽部の活動とは関係のない話をする	.102	.905		3.02 (1.31)
子育てについての話をする	.164	.872		2.91 (1.35)
他の父母とあいさつを交わす	.460	.497		4.24 (1.11)
父母だけで出かけたり食事をすることがある	.114	.367		2.14 (1.45)

表7 「子どものスポーツ活動に参加したきっかけ」の各項目の因子負荷量と因子の構成

因子名 各因子における項目の内容	因子負荷量				平均値（標準偏差）
	F1	F2	F3		
F1 自発的参加					
見ているだけでなく自分も動かなくなった	.950	.115	-.173		3.04(1.47)
スポーツが好きだったから	.932	.054	-.040		3.10(1.40)
見ているだけでなく口を出したくなった	.897	-.194	-.038		2.56(1.36)
運営するスタッフが不足していたから	.700	-.119	.324		3.14(1.51)
安全管理をもっと強化したいから	.632	.183	.011		2.54(1.37)
子どもが勝ちたいというようになった	.444	.273	.094		2.56(1.26)
健康に不安があったから	.354	.328	.074		1.76(1.06)
F2 家族勧誘					
家族に言われたから	-.140	.982	-.012		1.86(1.16)
子どもに練習に参加してほしいといわれた	.262	.517	.058		2.38(1.47)
F3 他人勧誘					
他父母から誘われたから	-.201	.091	1.043		2.26(1.40)
コーチに誘われたから	.335	-.098	.639		2.64(1.44)
因子間相関	F1	-	.547	.548	
	F2		-	.415	
	F3			-	

表 8 各因子項目および調査対象者の属性における相関関係

	交流		健康・楽しみ	交流			勧誘	
	地域	家族		子供	父母	自発的参加	家族	他人
運動習慣	.17	.13	.11	.14	-.01	.21	.21	.19
家族人数	-.29 *	-.25	-.31 *	-.18	-.23	-.28	-.29 *	-.01

*p<.05

表 9 各因子項目及びソーシャル・キャピタルに関する各質問項目の相関関係

	信頼		つきあい					地域での活動状況
	一般	他人	程度	人数	友人	親戚	同僚	
地域交流	-.29 *	-.14	.06	-.02	-.19	.00	-.21	-.13
家族交流	-.17	-.13	-.17	.00	-.29 *	-.08	-.21	-.01
健康・楽しみ	-.27 *	-.21	.18	.09	-.05	-.01	-.14	-.16
子供・交流	-.16	-.16	.22	.16	.28 *	.04	-.04	.27
父母・交流	-.05	-.07	-.02	-.17	-.02	.01	.10	.16
自発的参加	-.06	-.09	.14	-.05	.09	.17	-.23	.21
家族勧誘	-.07	-.12	-.06	-.13	-.13	.02	-.34 *	.08
他人勧誘	-.06	-.08	-.09	-.15	.00	.16	-.29 *	.17

*p<.05

参加することに対して、地域交流ができる、健康になる、楽しみであると考えていることがわかった。

6. 3尺度の各因子とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目の関連性

各因子とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目の関連性を見るために、相関分析を行った(表9)。

結果として、「地域交流」因子と「一般的な人への信頼」、「家族交流」因子と「友人とのつきあい」、「健康・楽しみ」因子と「一般的な人への信頼」、「家族勧誘」因子と「同僚とのつきあい」因子、「他人勧誘」因子と「同僚とのつきあい」について、いずれも負の相関が見られた。また、「子ども交流」因子と「友人とのつきあい」については、正の相関が見られた。子どものスポーツ活動に参加することで得られる、地域を含む家族外の人々との交流にメリットを感じている人ほど、日頃の人への信頼も高いと考えられる。また、「家族勧誘」因子及び「他人勧誘」因子と「同僚とのつきあい」の相関については、子どものスポーツ活動に参加したきっかけについて、内的な要因より、家族を含む他者の勧誘、つまりは外的な要因を重視している人ほど、同僚とのつきあ

いについては積極的であると考えられる。同様なつきあいとして聞いている、友人・親戚については、相関は見られなかった。また、唯一正の相関が見られた、「子ども交流」因子と「友人のつきあい」について、スポーツ活動への参加の際に、子どもと交流するという参加の形態を選択している人ほど、友人とのつきあいは盛んではないという結果であった。

7. 調査対象者の属性(家族の人数・構成・運動習慣)とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目の関連性

調査対象者の属性(家族の人数・構成・運動習慣)とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目の関連性を見るために、相関分析を行った(表10)。

結果としては、「運動習慣」と「つきあっている人数」、「運動習慣」と「同僚とのつきあい」の2つの関係において負の相関が見られた。つまり、運動変容ステージにおいて、「維持期」により近い人ほど、つきあっている人数が多いということがわかった。また、同様に運動変容ステージにおいて、「維持期」により近い人ほど同僚とのつきあいの程度が高いことがわかった。

表 10 調査対象者の属性とソーシャル・キャピタルとの相関関係

	信頼		つきあい					地域での活動状況
	一般	他人	程度	人数	友人	親戚	同僚	
運動習慣	-.22	-.24	-.14	-.43 ^{**}	-.18	.02	-.42 ^{**}	.22
家族人数	.01	.03	.07	-.01	.14	-.15	.11	.03

**p<.01

表 11 子どもが入部したきっかけ（カッコ内は回答の件数）

カテゴリ名	回答例
広告・チラシ (13)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で体験の案内が配布され、それを見て体験に参加したこと ・川崎市政だよりを見て ・学校に体験のお手紙がきて、参加させたところ興味を持った為
知人・家族の紹介 (18)	<ul style="list-style-type: none"> ・友人の紹介 ・知人がやっていた ・夫の勧め ・妻が友人に誘われて
運動の経験 (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに運動をしてほしかった ・全般的な運動の体験 ・運動不足解消 ・フラッグをやったことがあり子どもにも楽しいし、足が速くなると思ったから
教育としてのスポーツ (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・団体スポーツをやらせたかった ・社会性の学習 ・スポーツをする中で、協調性や楽しさを身に付けてほしかったから ・サッカーや野球とは違うチームプレーをさせたかったから
環境 (11)	<ul style="list-style-type: none"> ・近所で練習を見かけたから ・家から通える範囲にあったから ・練習を見かけて近くで習えるなら ・家の近くにあったから
子どもの希望 (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが入部を希望したから ・楽しそうにプレーをしている子どもたちを見て、子ども自身がやりたいと言ったので ・子どもがアメフトをしたいというので
大学の影響 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・甲子園ボウルをテレビで見て、子どもに憧れの選手ができたから ・自分がトマホークス（大学アメフトチーム）出身であったため ・法政大学の完全サポートと聞いたから

8. 自由記述の分類

「子どもが入部したきっかけ」という質問に対する自由記述回答を分析するために、KJ法による分析・分類を行った（表11）。

最終的に全体で、7つのカテゴリに分類された。回答の件数で見ると、「知人・家族の紹介」に分類される回答が18件と最も多く、それに続いて「広告・チラシ」の13件、家の近さやグラウンドの設備等の「環境」の11件であった。

続いて、「親である自分が練習に参加することで自分自身に生じた変化」の回答について、分類を行った（表12）。

最終的には、5つのカテゴリに分類された。回答の件

数を見ると「子どもの成長の実感」と「運動に対する興味・自信・実践」という2つのカテゴリに分類される回答がいずれも9件で最も多かった。また、「交友関係の広がり」に分類された回答は1件であった。

続いて、「親が練習に参加することで子どもに生じた変化」の回答について、分類を行った（表13）。

最終的に、4つのカテゴリに分類された。いずれもの回答数については均等にばらつきが出たが、回答の内容を見ると、それぞれ対照的なカテゴリ2組に分類された。

「実際に参加しているのは父親・母親のどちらが多いと感じるかとその理由」という質問に対する回答も同様に、分類を行った（表14）。この質問については、母親の方が積極的に参加していると回答した対象者はいな

表 12 親である自分が練習に参加することで自分自身に生じた変化（カッコ内は回答の件数）

カテゴリ名	回答例
子どもの成長の実感 (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの楽しそうな姿にパワーをもらう ・息子の成長を感じて嬉しい ・子どもの成長を身近に感じられるようになった ・いろんな子どもたちの持っている個性に気づくようになった ・子どもの世界が広がったことを実感し、仲間と喜び合う姿に共感する
運動に対する興味・自信・実践 (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・運動に対して自信がついてきた ・外で運動する気持ちよさを思い出してきた ・自分の運動不足解消 ・積極的に体を動かすようになった ・週一回でも定期的に運動をすれば、体も動きが良くなっていくこと
子どもとの関わりの重視 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・子とのコミュニケーションについて考えるようになった ・子どもを応援することが楽しくなった ・頑張りを応援したいと思い、子どもの練習を優先するようになった ・時間を作ってグラウンドに来るようになった
交友関係の広がり (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの方々を知り合うことができた
アメリカンフットボールへの興味 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・フットボール自体に興味はなかったが、今では試合を観戦するまでになった

表 13 親が練習に参加することで子どもに生じた変化（カッコ内は実数）

カテゴリ名	回答例
子ども同士のコミュニケーションの向上 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・学年が違う友達と話すことが多くなった ・チームの仲の良さが向上した ・子どもの世界が広がりたくましくなった
親子のコミュニケーションの向上 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・キャッチボールをしようと声をかけられるようになった ・フックフットボールに関する会話が增えた ・試合を見に来てほしいというようになった ・共通の話題ができて会話も弾む
身体的な変化 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・キャッチが上手になった ・足が太くなった
内面的な変化 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しさより勝利を意識するようになった気がする ・見守られている、頑張っている姿をアピールしてほめられたいと意欲的になった ・チームでの練習以外での個人練習に積極的に取り組んでいる ・何かを成し遂げる喜びを少し感じるようになってきたように思う

表 14 父親が参加する理由・母親が参加できない理由（カッコ内は実数）

カテゴリ名	回答例
スポーツの性質 (16)	<ul style="list-style-type: none"> ・アメフトは男性のスポーツだという印象が強いから ・体力面、アメフトという競技の性質から ・フットボール経験が必要なため ・女性にはなじみのないスポーツである ・何をきっかけにしてはじめてたらよいかわからない
役割分担 (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・男性は週末時間的に余裕があるから ・女性は週末も家事、子どもの世話がある為 ・家庭内の役割分担が自然にできているような気がする ・日曜日は子どもの面倒を夫にさせたいと考えている人が多い
運動に対する興味の差 (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・男性の方が体を動かすことが好きなので ・一緒に体を動かすという点で、男性の方が参加しやすいのではないかと ・自分もやりたいのではないかと
子どもとのコミュニケーション (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・男性は平日に子どもとのコミュニケーションがとれないから ・子どもを連れて行くため ・お父さんが子供と一緒に運動できるため ・送迎の為 ・運動経験のあるお父さんは誰も「子どもとキャッチボールをしたい」という夢を持っているから

かったため、回答内容は、父親が参加する理由・母親が参加できない理由として、回答されたものであった。

最終的に4つのカテゴリに分類された。4つのカテゴリの中でもアメリカンフットボールという男性イメージの強いスポーツであるという理由を挙げた、「スポーツの性質」というカテゴリの回答数が16個得られ最も多かった。

IV 考察

本研究では、NPO法人川崎市法政トマホークス倶楽部に子どもを通わせる親に、子どものスポーツ活動に参加することについて、3つの尺度を用いて質問を行い、その結果を基に因子の作成を行った。また、それらの因子と、ソーシャル・キャピタルに関する各質問項目と調査対象者の属性に関して、それぞれ相関分析を行い、検討した。

各因子と調査対象者の属性の関連性について、家族の人数が少ないほど、子どものスポーツ活動に参加することで、地域の交流ができると考えていることがわかった。今回対象としたNPO法人の本拠地である、神奈川県川崎市中原区・高津区・幸区など武蔵小杉駅周辺は、タワーマンションが続々と立ち並び2世代で暮らす「核家族」が増えていると考えられる。このようなこの地域に引っ越してきたばかりの家族にとっては、子どものスポーツ活動への参加は、地域交流のきっかけとなると考えられていることがわかった。この分析により、必ずしも「核家族化」が地域コミュニティ衰退の原因であるとはいえないということもわかり、逆に地域とのコミュニケーションを求めて、外に出かけていく場合もあると考えられた。

また、地域との交流に関して、今回調査対象として協力を依頼したこのNPO法人には運営に関する特徴がある。すなわち、アメリカンフットボール経験者のコーチだけではなく、父母コーチと呼ばれる存在がいることである。彼らは子どもをこのクラブに通わせている父母であり、ボランティアで練習に参加し、子どもたちとキャッチボールをしたり、積極的に子どもたちの安全管理を行ったりしている。この父母コーチ制度は、運営側が募集したわけではなく、自発的に広まったものであり、練習試合時の審判など、なくてはならない重要な存在となっている。また、近年ではその父母コーチたちの中で、特に父親が、「お父さんチーム」を設立し、子どもと一緒に熱心にトレーニングを重ね、お揃いのユニフォームを作成し、試合にも出場するほどである。その父母コーチの存在も影響しているのか、練習中のグラウ

ンドの横では楽しそうに談笑する他の父母の様子も見られる。「ご近所さん」の枠を超えて、地域のコミュニティが子どものスポーツ活動から生まれているのである。そのコミュニケーションを求めて、日曜日の武蔵小杉のグラウンドは大きな公園のようにぎわいである。まさに、子どもの習い事が地域そのもののコミュニティの活性化につながっているモデルと考えられる。

また、各因子とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目の関連性については、子どものスポーツ活動を通して得られる地域交流にメリットを感じている人ほど、一般的な人への信頼得点は高いことがわかった。信頼について、稲葉（2007）は、メリーランド大学のエリック・アスレイナーによる2つの分類を紹介している。それは、「戦略的信頼」と「道徳的信頼」である。2つの大きな違いは、その信頼の対象である。「戦略的信頼」とは、特定の個人に対する信頼、「道徳的信頼」は社会全般に対する信頼とされている。今回の、質問項目は一般的な信頼・見ず知らずの人への信頼を尋ねているため、後者の信頼について調査を行ったと考えられる。つまり、子どものスポーツ活動を通して得られる地域交流にメリットを感じている人ほど社会全般に対する信頼度が高いと言い換えることもできる。ソーシャル・キャピタルの概念の中でも重要な要素の1つである「信頼」が、地域交流と関連があることがわかった。

次に、唯一正の相関が見られた子ども交流因子と友人のつきあいについて、今回の調査では、友人の詳細を定義していないという点も影響しているのではないかと考えられる。正の相関が見られたということはつまり、子どものスポーツ活動への参加の際に、子どもと交流するという参加の形態を選択している人ほど、友人とのつきあいは盛んではないということであるが、この質問内の「友人」を高校・大学等の旧友を想定しているか、もしくは、この倶楽部活動で知り合った他父母を想定しているかで結果が大きく変わるとも考えられる。今回、旧友を想定していたと考えれば、現時点では、友人関係よりも子育てや子ども中心の生活をしていると考えられる。もしくは、この倶楽部で知り合った友人であった場合も、まずは子どもと交流することで、倶楽部の活動に馴染みたいという意図もうかがえる。

また、調査対象者の属性とソーシャル・キャピタルに関する各質問項目に関して、運動変容ステージにおいて、変容ステージが高い人（維持期に近い人）ほど、つきあっている人数も多く、つきあいの中では、同僚とのつきあいがより多いと考えられた。最近流行している皇居ランニングや、会社にも大学生と同じように「サークル」と呼ばれるものが存在し多くの活動が行われている現状を踏まえると、いわゆる仕事仲間である「同僚」と、

仕事帰りに一緒に趣味を楽しむ「仲間」は別のコミュニティではなく、ある程度つながりを持ったものであるとも考えられる。

KJ法により分類した記述回答の表14「父親・母親が練習に参加する（参加できない）理由について」について、女性が参加できない理由として、「(アメリカンフットボールという) スポーツの性質」が数多く挙げられていた。アメリカンフットボールのイメージとして、その激しさゆえに男性向けのスポーツであると考えられていることは、今回の記述回答でも明らかであった。よって、男性は参加しやすく、女性は参加しづらいと感じられた。その一方で、NPO法人川崎市法政トマホークス倶楽部の別事業として行われている、小学生の女子を対象としたチアダンスクラブに所属するスタッフによると、クリスマス会の親子ダンスという企画で、多くの家庭から父親が参加したという事例や、クラシックバレエ教室で、子どもを送り迎えしていた父親同士が、クラシックバレエを始め、土曜日に男性クラスの開設を希望し、娘と発表会に出たという事例も聞くことができた。チアダンスやクラシックバレエは、アメリカンフットボールとは逆に、一般的には女性のイメージの強いものであると考えられる。この事例を踏まえると、ただ単純に男性のスポーツだから、女性のスポーツだからという点だけでは、考察できない部分もあると考えられる。いわゆるスポーツの性質やイメージの問題が大きな影響を与えていることは、今回の回答でも明らかであるが、それよりも男女の間で決定的な違いがあるように感じられた。今回のKJ法の分類で明らかになったことは、同質問内の「役割分担」カテゴリ・「子どもとのコミュニケーション」カテゴリに属する「土日は夫に子どもの面倒を見てもらいたい」・「男性は週末時間的に余裕がある」・「男性は習い事については子どもの送迎をしている」・「女性は週末も家事・子どもの世話がある」などの回答にある、夫婦での役割分担や、男女間での子どもとのコミュニケーションのあり方の違いである。つまり、平日に働いている父親にとって、土日に子どもとコミュニケーションをとるために、習い事の送迎をし、参加する。母親も、父親が積極的に子どもとコミュニケーションをとってほしいと思っており、土日は子どもの世話をしてほしい

いと思っている。子どもの習い事を送迎していることだけが参加のきっかけになるのであれば、平日に送迎することの多い母親も、子どものスポーツに参加してよいはずだが、なかなかそういかないのは、家庭での役割分担として「家事」を担当しているからではないだろうか。「主夫」という言葉が少しずつ馴染み、企業の福利厚生が整い「働く女性」が増えていても、根底には、男女の役割分担が大きく影響しているのではないかと考えられた。

今後このNPO法人で、女性の参加を増やしていくために、アメリカンフットボールというスポーツというイメージは変わらないと仮定すると、男女の役割分担を利用して、女性が役割を発揮できるポイントを示していくことも重要であると考えられる。もちろん、一緒に運動することができるのが最善ではあるが、まず地域との交流を図っていくという点を重視すれば、きっかけとしてはこのような参加の形でも良いのではないかと感じられる。またNPO法人川崎法政トマホークス倶楽部では、ヨガスクールも開講しており、子どもはグラウンドでアメリカンフットボール、その間に母親は室内でヨガという家族一体で、日曜日に体を動かそうという取り組みも始まっており、今後より一層武蔵小杉グラウンドが地域交流の場として発展していくと考えられる。

親子で参加するスポーツプログラムは、指導者の確保、安全確保、地域交流、地域社会の互助などの機能を帯びていると示唆されているが（荒木・中村 [2013]）、本研究の結果もそれを支持するものとなった。今回の調査を通して、ソーシャル・キャピタルと地域交流や運動習慣について関連が見られたが、ソーシャル・キャピタルについては、あくまで単項目との相関であり、各項目についても、「友人」の定義など、細かな想定のない項目もあった。各項目の細かな設定とソーシャル・キャピタルを総合的に測るための測定指標の必要性が示唆された。

謝辞：本研究を行うにあたり、質問紙配布・回答については、NPO法人川崎市法政トマホークス倶楽部の父母・指導者の方々に多大なご協力をいただきました。皆様に記して感謝の意を表します。

引用文献

- 荒木邦子・中村好男 [2013]「保護者（みんな）がコーチングスタッフ方式の総合型地域スポーツクラブ—神奈川県相模原市「やんちゃるジム」の事例—」、『スポーツ産業学研究』, 23, 119-125。
 稲葉陽二 [2007]「ソーシャル・キャピタル—「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題—」、生産性出版。
 稲葉陽二 [2011]「ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ—」、中央公論新社。

- 岡浩一郎 [2003]「運動行動の変容段階尺度の信頼性および妥当性—中年者を対象にした検討—」『健康支援』, 5, 15-22。
- 川喜田二郎 [1967]『発想法—創造性開発のために—』、中央公論社。
- 内閣府国民生活局市民活動促進課 [2003]「アンケート調査」 <https://www.npo-homepage.go.jp/data/report9.html>
- 湯浅資之・西田美佐・中原俊隆 [2006]「ソーシャル・キャピタル概念のヘルスプロモーション活動への導入に関する検討」『日本公衆衛生雑誌』, 53, 465-469。
- Arai, H., Nagatsuka, M., & Hirai, K. [2008], 'The relationship between regular exercise and social capital among Japanese community residents'. *International Journal of Sport and Health Science*, 6, 188-193.
- Oka, K., Takenaka, K., and Miyazaki, Y. [2000], 'Assessing the stages of change for exercise behavior among young adults: The relationship with self-reported physical activity and exercise behavior', *Japanese Health Psychology*, 8, 17-23.